

都心にふさわしい図書館を考える懇談会 第2回会議

議事録（概要版）

日時：平成24年10月9日（火）午前10時開会

場所：札幌市中央図書館 3階 研修室B

1. 開会

●事務局（調整担当課長）

前回、事務局案をご覧いただきながら、コンセプトについて活発に議論いただいた内容を踏まえ、ビジネス支援の部分など、資料に若干の修正を加えている。

今日は引き続き、基本コンセプト等、それぞれについて、皆様からアイデアをいただきたい。

---資料説明---

●事務局（企画調整担当係長）

（再開発所管部局からの情報について）

- ・再開発事業を所管する部局から提供されている最新の情報。色の付いた部分北1西1が計画地。現在の市役所の斜め向かい、市民ホールの北側となっている。
- ・建物イメージは前回お示ししたように、低層棟が市民交流複合施設、高層棟は160mの高さで、下の部分は放送局、その上はオフィスとなっている。地下は駐車場。（駐車場の下は地域冷房施設等環境関係の施設）
- ・スケジュールは、平成24年度基本計画、25年度基本設計、26年度実施設計と続き、26年度末着工、27・28年度工事、29年度末竣工、30年度供用開始という予定になっている。

（資料の変更について）

- ・基本コンセプト等について修正を加えた。
- ・「札幌の魅力発信」の部分について、吹き出し部分の説明を若干詳しく記載。
- ・「調査研究支援」を「課題解決の場」に修正。前回の議論の中で、調査研究支援という表現では、ビジネスパーソンという限られたターゲットの印象があるため、市民の生活・仕事・活動に役立つ資料・情報を提供するという、生活支援の要素を盛り込んだ。
- ・空間構成「動」の空間に「行政資料を検討してはどうか」というご意見があり、蔵書・資料の部分に加えている。

2. 議事

●河村座長

事務局の方で、前回の議論を踏まえ、コンセプトの修正が示されているので、これをもとに進行したい。

基本コンセプトについてはこちらを土台に進めて良いか。

●細谷委員

前回の宿題について考えていた。豊田委員の発言のとおり、インパクトのある名称で予算決定権者などにアピールしていくという考えに共感しているが、他の事例を見ても、「図書館」という言葉が付くものが多く、難しいと感じている。

●河村座長

せっかくやるのだから、新しいネーミングに加えて括弧書きで札幌市の図書館であると示すような形が良いのではないか。

コンセプトについて、資料を事前にお読みいただいていると思うが、皆さんの意見はどうか。

●豊田委員

基本コンセプトで言えば、従来の図書館との違いをどのように出すかと考えた時に、従来は「本を読む」というところに重点を置いていたのに対し、都心にふさわしい図書館では「知る場所」というところになると思う。

事務局の方で、課題解決、札幌の魅力発信というような形で書いているが、例えば、1階と2階の構成を考える時に、1階は「札幌について知りたい」というニーズに応えるスペース、2階は「札幌市民の知りたい」というニーズに応えるコレクションとサービスという感じでコンセプトをまとめると、必要なものを肉付けしやすいのではないか。

今回の計画では、共用開始が平成30年となっていて、時代の移り変わりが速い中、6年後を予測するのは難しい。また、「こんなことが面白いだろう」と理想論でつくって、実際は地元の人たちのニーズと合わず、「建物は美しく出来ました。開館時には大きなセレモニーをしました。」となっても、その後、閑散として使われない例も多々ある。

前回、機能を絞らざるを得ないと発言したが、今の段階で絞り過ぎて突き進んで、蓋を開けたら誰も利用しないということになるのは怖い。市民ニーズと共に、毎日サービスを提供している図書館員の意見など、十分吸い上げて行きたい。もちろん、面積の制限があるため、取捨選択は必要となるが。

●河村座長

今から10年前には、図書館でもインターネットが出来るように整備するという方向だったが、家庭にもインターネットが普及し、個人の端末でモバイル通信もできるという状況の今、図書館にパソコンを並べて、インターネットを開放するということが重要性を持つかどうか。豊田委員の発言のとおり、6年先のことを決めるのは非常に難しい。そのような部分については、流動性を持たせて、もう少しフリーにお話を伺って行きた

い。

今回変更した資料の中で、札幌の魅力発信というのが、大きな位置付けになっていると感じるが、オオドオリ大学の学長ということで、札幌の魅力発信をされている猪熊委員のご意見をいただきたい。

●猪熊委員

豊田委員の発言のように、「知る」という時に重要なのは、「人」なのではないかということに関心があり、今いるライブラリアン、図書館の本を選んでいる人たちが、より全面に出て、そこに付加価値を付けていくというのが重要だと思う。

そこに「道具」としてITがあり、知る仕組みがあるというのが価値になってくるのではないか。

オオドオリ大学の学生登録数2,000人のうち、一番多いのが三十代前半の、家と会社の行き帰りの途中で、オオドオリ大学のようなところに触れていたい、情報を得たいという人たち。彼らを見ていると、必要なものがなければ、自分たちで場をつくり、情報を集め、という作業をしているように感じる。6年後にはそういうことが当たり前、市民活動というよりももっと気軽に、サークルのように関わりながら生活している人が多いのではないかと考えている。

先日、小樽文学館に行った際、温故知新というのか、昔からの形を知るとというのがとても良いと感じた。年間を通じた企画展をするなど、「ものを伝えていく」という図書館としての性質もあって欲しいと思う。

資料にSPBS (SHIBUYA PUBLISHING BOOKSELLERS) の画像があるが、図書館の皆さんが思い描かれているのは、学芸員のように本をセレクトしているセクターがいて、「このジャンルのことはこの人に聞いてみよう」というような、市民との関わり方がぐっと近くなるということなのかと。

●河村座長

図書館が書店に負けない本来の機能は何かということで、流動が激しい出版界で、書店では入手できなくなったような時に、図書館には利用可能な状態で保管しているということも大事だと考えている。

●細谷委員

逐次刊行物というと、かつては書店では最新刊しか扱っていなかったが、今はバックナンバーを揃えている書店もある。

●菊地委員

サービスと機能の重点化というところで、平日はビジネスパーソンの利用、土日はファミリー型の利用という二面性を考えると、時間帯というのも大きな要素。

平日の昼間は仕事をして、その後、更に勉強したい、知りたい、新しい世界を開拓したい、となると、夜間の需要が考えられる。

空間的な面では、資料にくまもと森都心プラザ図書館の画像があるが、デスクトップ

のパソコンを並べたブースというよりも、この先は、図書館のレイアウトの中で自由に使える、簡易な端末を貸し出すというイメージに変化しているのではないかと思います。その中で会話が繰り広げられるというような。

さらに、前回レファレンスのことを申し上げたが、この図書館に所蔵していなくても、中央図書館に所蔵しているとわかった時に、出来るだけ早く本を届けるクイックサービスというのはどうかと。つまり、朝その資料を見つけたら、夕方には所蔵館から本が届いているという、ビジネスの世界ではそういったスピード感が必要なのではないか。6年後となると、自分ではわからないが、都心部にふさわしい図書館となると、どんと構えた戦艦大和のような中央図書館とは違う、駆逐艦的なイメージを持っている。

●細谷委員

猪熊委員の「人が重要だ」という発言のとおり、レファレンスに重要なのは「人」。

札幌市の図書館は専門職制度をとっていないため、長くても4～5年で人が入れ替わり、経験を積んだ職員の育成が難しい。日野市立図書館の行政情報サービスは素晴らしい。年度途中の通達等様々な資料を加除式で配架し、年度が終わった時点で製本するという、「動いている」資料がある。都心部のビジネスや行政情報のサービスにはそういったことが重要だが、そのためにはベテラン職員の存在が不可欠である。

●豊田委員

言い方は悪いが、人は利用者に鍛えてもらうしかない。すべての準備が整ってから利用者を迎えるのは無理な話で、オープン後、利用者の様々な要望に応えながら、経験を積み重ねていってこそ良いサービスが出来るようになる。

●細谷委員

だからこそ、経験を積み重ねていく職員体制というものが必須だと思う。

●豊田委員

コレクションを収集しようと思った時にも職員のスキルは重要。美術館の常設展と企画展が併設されているイメージで言うと、常設展は基礎資料である参考資料で固め、企画展はテーマに沿って企画をして本を収集する。この企画展は最初の段階では図書館員が全てやるのは無理だろうと思う。例えば恐竜について企画する時には、札幌市内の恐竜の専門家、市民に本を選んでもらうというのも一つの手ではないか。オオドオリ大学にいろんな専門家がいるのだとすれば、その人たちが自分の100冊を選んで展示し、トークもする、といったような。市民ニーズの吸い上げや職員のスキルアップなどのために、このような試行錯誤の過程も組み入れてもいいのではないか。

都心にふさわしい図書館のコンセプト、人が立ち寄りやすい場所で、「書店とも喫茶店とも違うものを」となった時に、いかに人とのつながりをつけていくかということだと思う。

今までも、図書館の中でセミナーを開いているが、企画と展示が一致していないと感じることが多い。企画展示をする時には、連動したセミナーを開催するなど、流動化し

ていく。例えば、朝、「新聞の読み方セミナー」があれば、そこでは当日の新聞が用意してあり、セミナーの後、記事をじっくり読みたい人はそのまま図書館に留まる。語学教室を 30 分するならば、辞書の引き方をレクチャーしたり、語学関係の本を並べるといような。平日と週末で大きく利用者層に合わせた企画と、連動したコレクションを魅せる仕組みも必要。

人と人とのコミュニケーションが疎遠になっていく時代の中で、どんなふうに人をコネクしていかと言え、やはり「人」が重要。人を介して知識を得るという流れを、皆が集まりやすい場所、地の利を最大限に活かして実現できる仕組みが盛り込めたら良いと思う。

●細谷委員

横浜市で子どもの虐待防止協会の全国大会が行われた時に、横浜市立中央図書館が、子どもの虐待に関する資料を集められる限り集め、参加者に提供したということがあり、その後、全国から札状が横浜市役所に舞い込み、図書館の存在意義が役所の中で認められる契機となったと聞いた。豊田委員の発言のとおり、企画とコレクションの連動というのは、重要なポイントの一つだと思う。

●猪熊委員

せんだいメディアテークは市民を集めて、企画を一緒につくっているという感じで、図書館の所蔵は少ないかもしれないが、絵本の中のお弁当を作って展示したり、「行ってみたいな。」「においを嗅ぎに行きたいな。」と思わせる誘導作業があり、面白みを感じる。また、奇抜な建物なので、観光客も多数訪れるというのがあるが、札幌でも、観光客も気軽に情報を収集して、次にどこに行こう、というような作業性がある場所というのは重要。

その他、コンシェルジュと中間のような人が図書館にいて、企画についても本についてもわかっていて、今街の中で起こっていることもわかる、そういう人がいると、本とつなげたり、団体とつなげたり、活動とつなげたり、ということが出来たら良いと思う。

細谷委員の発言のように、人材育成というのは重要で、その人がいる図書館に行きたいという、この本はあなたのお家の近くなら、〇〇図書館にありますよ。」という、このようなコミュニケーションがとれたり、街中だから出来ること、育てていけること、が見えてくると良いと思う。

●河村座長

レファレンスが大事だ、人が大事だという意見が出ているが、30 年前はサーチャーの時代が来るというように言われていて、結局現在は図書館員がその役割をこなすのではなく、市民が各自で調べるというような動きがある。アメリカでも 50 年も前から、レファレンスの重要性が言われ、それぞれの分野の大学院を出た人が、特定分野のレファレンスをやるという方向もあるが、どんな人が図書館員になってレファレンスをして、人間では無理がある。例えば国立国会図書館で作り始めているレファレンスデ

データベースのようなものに、利用者を導くという誘導係であって、自分が答えるのは無理である。

ここでは図書館のあり方の議論ではなく、都心にふさわしい図書館とは、というところになるが、6年後は本当にわからなくて、例えば15年前にインターネットが始まった頃から考えて、それから10年後は、みんな携帯電話を持って通信をしている。今は、図書館で人にお願いして調べるというよりも、自分で調べてしまう時代。本の貸出しにしても、自動貸出機が導入されて、自分で手続きをした方がいいという若者がいて、一方ではカウンターの人に手続きしてもらいたいという人もいる。6年後というと、コンピューターが使える人がいなくなり、ほとんどの人が検索機能を使えるようになる。

私が言いたいことは、ある程度おおまかなコンセプトを決めたら、実際に具体的なサービスを開始する時には、更に検討会のようなもので検討されるべきことだということ。

空間的なことと言うと、ここで決めるのは、変更可能なモジュラー的なプランであり、利用者が変化する中で、図書館をどのように対応させるかということでは、先ほどの菊地委員の発言のような、開館時間というのは重要だと思う。

後ほどお配りするが、非利用者（調査は北広島市）を調査した結果、市民の60%が非利用者であり、そのうち20%が立地の問題、その他20%が開館時間の問題を挙げている。市民全体でいうと24%、札幌市民でいうと、40万人がこの二つの問題により図書館を利用できていない。その半分の20万人が、都心にふさわしい図書館を利用してくれたら、大通という場所に建てた施設として、情報発信力は大きいと思う。

このような人たちを掴むには、その人たちが何を望んでいるかというような、細かいところで言えば、セミナーとコレクションのような一つのサービスがあるが、もう少し大まかな、基本コンセプト、ターゲットについてはいかがか。

●細谷委員

6年後が分からない中で、とにかく何らかの形は定めなければならず、変更可能な空間設定をしていく時に、今まで出てきたような、コレクションとセミナーのような考え方が生きてくるのではないか。例えば、中央図書館では、セミナーの会場は3階だが蔵書は1階2階にあるというような造りではなく、隣接してそういうことが出来るような空間設計とし、セミナーのない時はそこが憩いの場になるような。

30年前、中央図書館の立地が決まる時に、さまざま人を対象に、自分の家からの交通費と所要時間の調査を行った。そのような経験を通して、利用者側にもしっかりとしたニーズがあって、それが図書館に伝わっていないというのではなく、利用者自身が図書館へのニーズに自分でも気付いていなかったり、図書館で出来ることを知らない、という問題があることがわかった。例えばレファレンスに取り組む姿勢の中で、「こういうふうに図書館というのは利用できるんだ」という経験をして、利用者も図書館職員も育つのだと思う。

この懇談会の最終提言として、そういうレファレンスを担える職員体制の必要性は是

非とも書き込みたい。

●河村座長

座長を離れ、個人的に言えば、レファレンスは無理だと思う。無理だし、要求されない時代がやって来る。レファレンスカウンターの体制をどんなに整えても、利用者が自分で調べ、自動貸出機で本を借りていくことを選ぶ時代になる。

●豊田委員

レファレンスが必要なくなるという意見には反対。実際に自分で調べる学生は多いが、自分で調べられると信じている若者も非常に多く、検索技術はあるが、その情報、例えば人口統計を調べる時に、統計の取り方がわかった上で語れるかというところではない。

また、利用者の求めるレファレンスというのは、いかに迅速に正解を出すかという部分だけではなく、相談した時に、あれこれ手を尽くして調べる姿勢、接客という側面もある。初めのうちは、高度なレファレンスは少なく、ほとんどが「この本ないですか」という質問であっても、丁寧に答えていくことによって、利用者と共感し、スキルアップしていく。その役割は図書館員が担っていくべき。

●河村座長

図書館にレファレンスが不要ということではなく、都心にふさわしい図書館が立地する場所に、レファレンスの人材を置くということだけがメインなのかということ。

最終的に調べ物をしたい人は多少の不便があっても、中央図書館に来る。中央図書館には専門のレファレンサーが必要だが、さらに先を見れば、札幌市だけでなく、道立図書館、国立国会図書館などで蓄積されたレファレンスのデータベースを共有するという時代が来ている。厳密に言えば、国立国会図書館の職員のような、異動のない人たちにしか本当のレファレンスにはできないということになってしまう。このようなことから、レファレンスに重心を置くのではなく、違った位置付けで都心にふさわしい図書館を考えるべき。

●細谷委員

大通のこの立地条件だからこそ、レファレンスに力を入れたい。札幌市の図書館のレファレンスの水準は低く、全ての水準を上げていくことも必要だが、まずは大通でレファレンスサービスというものを市民に見せていきたい。

浦安市図書館では、レファレンスルームというものを設けているが、高度なレファレンスでなければ利用できないような雰囲気がある。そのような先入観を壊していくのが都心にふさわしい図書館の役割だと思う。

豊田委員の発言のとおり、レファレンスは接客業だと思っていて、例えば学校図書館司書が、生徒の漠然としたレファレンスにも、レファレンスインタビューを重ね、必ず取っ掛りを見つけて対応している。札幌市の職員はそれが出来ていない。

学校図書館運動を通じてもうひとつ感じたのは、子どもたちが何かを検索する時のキーワードの酷さ。情報を絞り込む時の文脈が身についている人と、そうでない人とでは

大きな違いがある。

●河村座長

レファレンス機能が不要というのではなく、例えば、資料に課題解決支援ということで挙げられているように、支援にはレファレンスやコミュニケーションが必要となるが、そこに、高水準な職員が必ずしも必要なのかということです。

●豊田委員

この場ではないとしても、職員体制については議論が必要。

●菊地委員

レファレンスの性格も整理しながら進めていく方が良いのではないか。

●河村座長

「中央図書館にあるこのような資料を使って調べられます」と案内することもレファレンスサービスと捉えている。相当数の資料を用意して、レファレンスを中心に置くのは難しいと考えている。他にも情報を発信するとか、知的空間を提供するとか、立地を活かした機能ということで議論を出来ないだろうか。

●豊田委員

札幌の魅力発信というのは良いと思う。十進分類にこだわらず、歴史、自然、食、スポーツ、旅、そういうテーマに沿った形であらゆるものを収集するなど。

●細谷委員

すべてのNDCを崩すのではなく、一定程度のコレクションについて、テーマに沿って別置する方法は良いと思う。

●豊田委員

職員のスキルアップということでは、セレクトライブラリーを構成することも効果が期待出来る。テーマに沿って収集した資料を、自分なりに分類してみる。自分で収集した資料であれば、レファレンスにも自信を持って対応できる。

●菊地委員

今、中央図書館でやっている展示（ノスタルジック札幌1972）では、オリンピック関連の展示以外に、その頃、どんな本が読まれていたのか、どんな言葉が流行したのか、という切り口の展示もされている。

●河村座長

本屋大賞のようなことをセレクトライブラリーでやるのも良いと思う。「図書館員がこんな本を集めました。」ということで、企画した職員は、その展示に関する知識があり、レファレンスも出来る。

●豊田委員

図書館員も「このコーナーは私が作りました」と個人の名前を出していくべき。

●河村座長

そのような取り組みは大学図書館でもあり、将来図書館員になりたいという学生が、

書店で本を選び、展示し、貸出しをしている。そのような部分はセレクトライブラリーが担い、全体的にはNDCは崩さない。

●細谷委員

レファレンス機能をそれなりに持つには、それなりのバックヤードが必要だが、面積の制約があるので、開架の集密書架を設けるなど構想してはどうか。背表紙を見ながら資料を選ぶ良さもある。

●豊田委員

雑誌のバックナンバーなどは結構ニーズがあり、それを求めてやって来る人もいる。ビジネス的にも雑誌のバックナンバーは必要。

●細谷委員

市民運動などでも、最新の情報を得るには、ネット以外では雑誌ということになる。単行本にまとまる前に、何かを調査しようと思った時に、雑誌記事というのは欠かせない。

●豊田委員

そういう意味でも、空間的な意味でも、書架が天井までであるような重量感というもの、図書館としては必要。

●細谷委員

3つのコンセプトを担いつつ、「図書館ってこんなことができるんですよ。」というものを見せる、ショーウィンドウ的な場と考えてはどうか。

豊田委員の発言のように「1階は札幌を知る、2階は市民の知りたいに応える」という考えは良いと思う。

●豊田委員

1階と2階のフロア面積は決まっているのか。

●事務局（企画調整担当係長）

100%固定ではないが、2フロア、1階2階部分で図書館とアートセンターが共存するということになる。1階は建物全体のエントランスフロアでもあるため、面積は小さいことが想定される。1階は300~400㎡、残りは2階というような想定。

●細谷委員

施設全体の階段とは別に、図書館内の階段はあるか。

●事務局（調整担当課長）

それは必要な機能として、我々も要求していく。

●河村座長

基本コンセプトとしては、資料に挙がっているもので良いということと、蔵書については雑誌をメインとして、セレクトライブラリーで蔵書も置くというような、大きなことを決めたい。

環境面でも、1階2階のイメージが出来ない段階では、プレゼンテーションルームが

必要だとか、キャレル席が必要といった、大まかな機能を決めていくことにしたい。

●豊田委員

1階の面積が小さいとすると、1階2階で静と動をはっきりと分けるには無理があり、必要な機能をモジュール的に挙げて、組み込めるように考えてみてはどうか。

●河村座長

前回の懇談会を受けて資料の内容が修正されたように、今回もまた資料が改善され得る内容を議論したい。具体的ところで、キャレル席が必要であるというような環境面ではどうか。

●細谷委員

先ほど私が言った、集密書架のような、集中的に資料が置ける部分、例えば雑誌のバックナンバーを揃えるような機能は必要。

●河村座長

大通でのレファレンス機能と考えた時に、「このことはもっと詳しく中央図書館で調べられます」というような、案内機能として捉えて良いか。

●菊地委員

おそらく、大通が機能したら、相乗効果で中央図書館の利用も増えるのではないか。

もう一つ環境ということ言えば、同じ施設内にアートセンターが設置されるということから、アートセンターでは映像作品やミニシアターのようなものが出来て、図書館はそれに連動して書籍を置くというイメージ。書店ではなかなか置いていないような芸術文化、美術関連の専門雑誌も結構な種類がある。

●細谷委員

カフェとの連続性というところでは、道庁の1階にドトールが入っていて、カフェで買ったものでも、持参した飲み物でも利用できるという、これからの公共施設のカフェはそのようなイメージ。

●事務局（調整担当課長）

具体的には、1階は、付近の通りから見える建物の顔となる部分で、アートスペースやカフェが入り、図書館も人が引きつけられるような見せ方をするイメージ。

施設西側は、新たに整備した創成川グリーンベルトを中心に札幌の魅力を演出するという狙いもある。

●細谷委員

大阪市立中央図書館は地下鉄駅直結で、改札を出ると、ガラス張りで雑誌のコーナーが見渡せ、ずらっと並んだ書架の重量感と気軽さが同居している良い雰囲気だった。また、図書館に入らず通り抜ける人も想定した空間設計になっていて、余裕がある時に寄ってみようという気にさせる。

●事務局（調整担当課長）

（参考資料の図では、建物の右（東側）が創成川）1階の面積が狭く、2階の方が広

いということだが、ワンフロア全て静の空間である必要はない。少なくとも動の空間は、通りに面した1階が良いというように組み合わせるなど。

●細谷委員

図書館のメインフロアを2階と考えると、必ず1階を通るという導線は良い。反対に2階スペースが小さければ、1階しか利用せずに終わるという可能性も高い。

●河村座長

原案として挙がっている中で、カフェ部分、本を見ながら飲食が可能という機能を持たせることは良いか。

もう一つ、一部有料という考えについてはどうか。

●細谷委員

一部有料ということについては反対したいが、どういうことを有料と考えているのか。

●事務局（企画調整担当係長）

前回の資料では、キャレル席やミーティングルームという部分について、予約制にしたり、あるいは有料化の可能性も検討するという程度の記載。他都市でも有料化している事例はある。

●細谷委員

ミーティングルーム・プレゼンテーションルームというものがあれば、時間帯によって、ビジネスマンが利用したり、中高生が利用したり、活用されると思うが、他の機能を押しのけてまで必要とは思っていない。ましてや有料ならば必要ない。

●豊田委員

私もミーティングルームには疑問。スペースがふんだんにあれば別だが。

図書館のイベントスペースとして、オープンスペースとしても利用できるセミナールームがあると良い。

●細谷委員

壁で仕切らず、セミナーをやる時だけ、上から何か（仕切り、スクリーンなど）が降りてくる程度で。

●豊田委員

カフェ機能が図書館の中にあるならば、そこをセミナーの場所に利用するという考え方もある。

●細谷委員

紀伊国屋書店のインナーガーデンのイメージ。（暗くできないため、昼間のセミナーではスクリーンが見えにくいという部分が難点）

●河村座長

上からスクリーンが降りてくるという発想は良い。全体を暗くした時に、手元だけ照らす照明も降りてくるなど。

セミナーの活用という点では、猪熊委員が展開されているような活用の方法が考えら

れる。

●豊田委員

限られたスペースの中では、フレキシビリティを持たせた形が必要。

●河村座長

カフェの有効利用というのも非常に良い。実現するかどうかは別としても、そのような要望はしたい。

図書館のネーミングについてはどうか。

●細谷委員

「メディアタウン大通図書館」というのを考えた。

●豊田委員

「Kitara (キタラ)」や「かでる」のように3文字で、ニックネーム的に「しるべ」というのを考えた。「知る」というコンセプトと北海道の方言と。

●河村座長

今のような幅広い感じで、市民に考えてもらおうというのも良いだろう。

(イメージの共有が出来ているという前提で) 前回同様、今回の懇談会も議事録の中で議論の内容が見えてくると思うが。

●細谷委員

課題解決に資する雑誌を幅広く収集するというのは共有出来ているが、図書を置くことについて、個人的には単行本も必要と考えている。前回のように30万冊とは言わないが、ある程度の図書資料は必要だと思う。

●河村座長

雑誌と新聞をメインでということではあるが、図書館として、本に囲まれた中で書齋的な雰囲気を醸し出すというような非日常空間という意味でも本を置くことに反対ではない。

ただし、限られたスペースで、例えば70万冊あっても満足しない人がいて、本だけでは満足させられないということ。ある分野に特化した部分は本で構成するというような。そういう意味で本は置くということで良いか。

●豊田委員

マスコミ向けに、例えば「雑誌のバックナンバーを揃えました」というのは一つのキャッチフレーズになる。その他、図書館に必要な基本的な資料は揃えた方が良いが、大通カウンターを見てもわかるとおり、貸出の有無によって、必要な人員というのも大きく変わる。完全自動化が出来れば貸出しサービスがあっても良いが。

●細谷委員

利用者としては、目の前に欲しい資料があるのに借りられないというのは辛い。

●河村座長

借りられてしまえば、他の利用者が見ることができなくなる。ここでは、閲覧だけし

て、借りたい人は、他の図書館施設から借りる。

●細谷委員

田原市立図書館では、閉館 1 時間前から翌日の昼前までに返すという一夜貸しサービスをしている。

●河村座長

それは考え次第。都心にふさわしい図書館で本を見ることをきっかけに、「買いたい人は書店、借りたい人は他の図書館施設へどうぞ」という誘導をするだけでも効果は大きい。

●豊田委員

ここで終わるとは思えないので、貸出の可否については次回以降にしてはどうか。

●河村座長

では、開館時間についてはどうか。

●細谷委員

平日は夜 9 時か 10 時までと考えている。10 時位までに地下鉄に乗れば、乗り継ぎのバスがある。あの辺りの施設は、ファッションビルは 8 時、デパートは 7 時、場合によって 8 時、市民ホールは 9 時ということを考えると、人が回遊している時間というのは 9 ～ 10 時位まで。それ以上無理とコストを詰め込む必要はないと感じている。

●猪熊委員

確かに、夜になると人は札幌駅かすすきの側に行ってしまうため、図書館の立地場所を考えると妥当。

朝早くから開館するという必要だと思う。(出勤前の利用ニーズ)

●河村座長

開館時間は、朝早くから夜遅くまで。運用する際に流動的に決めるかとは思うが。

次回の予定については…。

●事務局（調整担当課長）

前回と今回で議論いただいた事柄を項目毎に整理し、それを見ながらさらに議論を深め、皆様のご意見を資料に反映出来ればと考えている。

●河村座長

今回の議論を踏まえた形で次回資料が提示されると思うが、それをまた事前に送っていただき、目を通した上で議論を進めたい。

---次回予定---

第 3 回 10 月 23 日（火）10：00～（会議室）